

# 女子ハンドボール競技における右利きバックコートプレイヤーのシュートプレーの特徴 — 世界における日本の現状と課題 —

川俣 ゆかり (200911942、ハンドボール方法論)

指導教員：山田 永子、會田 宏、藤本 元

キーワード：ミドルシュート、ロングシュート、記述的ゲームパフォーマンス分析

## 【目的】

ハンドボール競技におけるバックコートプレイヤーのシュートは、ゴールキーパー(以下 GK)との勝負のみだけでなく、ディフェンスを突破する技術も必要となる。本研究では、世界のトップレベルの右利きバックコートプレイヤーが実践しているシュートプレーの様相を明らかにすること、世界トップレベルプレイヤー(以下 世界トップ)のシュートプレーと比較し、日本女子代表(以下 日本女子)の右利きバックコートプレイヤー並びに本研究自身(以下 川俣)が試合で行っているシュートプレーの問題点や改善点を検討する。

## 【方法】

2011年女子世界選手権、2012年夏季オリンピック競技大会(アジア予選、最終予選)、2011年関東秋季リーグ、2011年全国日本学生選手権大会、2012年関東春季リーグの試合を対象とし、世界トップ3名、日本女子2名、そして自身のミドル・ロングシュート場面に関して、ボールを保持する瞬間からシュート完了までの映像を観察しながら、独自に作成した観察シートにまとめて分析した。

分析項目：「ボール保持前の助走」局面 ①防御者の位置、「ボール保持の瞬間」局面 ①位置、②防御者との関係、③体勢、「ボール保持中の助走」局面 ①助走方向、②ドリブルの有無、③フェイントの有無、④フェイントの種類、⑤歩数、「シュート」局面 ①位置、②ステップパターン、③上半身の使い方、④フォワードスイング、⑤防御者の対応、⑥GKの対応、⑦結果

各個人について、プレー要素ごとに、項目間の生起率を比較した。統計処理に関しては、有意水準5% (両側検定)とし、Fisherの正確確率法を用いて比率の差を検定した。3つ以上の項目で有意差が認められた場合には、Ryanの方法により有意水準を調整して多重比較を行った。

## 【結果と考察】

### 1、ボール保持前の助走とボール保持の瞬間

対象者6名全員は、防御者との間合いを十分に取って、防御者に接触されない位置でボールを受け取り、次の局面に入っていることが認められた。

### 2、ボール保持中の助走

ボール保持中の助走において世界トップは、ゴール方向への助走の生起率が高いことが認められた。一方、日本女子に共通して見られた利き腕方向の助走は、日本女子が世界において形態的に劣るため、防御者をかわして移動している結果だと考えられる。シュートに至るまでの歩数が増すと、それだけ防御者に準備するための時間を与えることになるため、日本女子は、より少ない歩数でのシュートが課題となる。

### 3、シュート

ステップパターンは6名共に、ジャンプシュートを最も用いていることが認められた。上半身の使い方では、日本女子も世界トップのように防御者との距離が近い時は、上半身の使い方を工夫すると様々な状況の中で効果的にシュートを打つことが可能になると考えられる。また、フォワードスイングでは、オーバーハンドのみならず、様々なシュート動作の選択肢を持つことで、防御者に予測されずにシュート達成できる可能性も高くなると考えられる。GKの対応に関して世界トップと比べ日本女子は、①GKが誤りの方向に反応する比率が低く、②ブロックされる比率が高いことが認められた。これは、日本女子が世界トップと比べて形態的に劣るため、防御者をかわしてシュートを打つことが困難で、GKもシュートコースを限定しやすいことが原因と考えられる。

## 【結論】

世界トップは、それぞれが自己の形態や個性を活かして様々なシュートプレーを実践していたことから、効果的なシュートはプレイヤーの数と同じだけあると考えられる。一方、日本女子2名と川俣は、防御者にブロックされることを少なくし、GKを誤りの方向に惑わすようなシュートを打つ比率を高くすることが課題である。また形態面での劣位を考慮すると、上半身の使い方を工夫する、ステップパターンにおいてバリエーションを増やすなどシュートにおける工夫も必要である。

## 【文献】

山田永子 (2010) わが国の女子ハンドボール競技におけるシュートプレーの問題点とその改善に関する研究 - ヨーロッパ強豪国との比較に基づいて - . 平成22年筑波大学大学院博士論文.